

ホノルルにおける戦前の日本人漁業

飯田 耕二郎

はじめに

第二次大戦前のハワイにおいて、日本人が独占していた職業の一つに漁業がある。日本人が移住する以前のハワイにおいては、ハワイ人や中国人が沿岸地域で小規模に行うのみであったが、一八八五年の官約移民の渡航以来、日本人が増加するにつれて魚の需要が増し、当初は耕地労働者から次第に漁業に転ずる者が増え、ハワイ諸島全体に広まっていった。筆者は以前にハワイ日系人が従事した主な職業のうち、コーヒー栽培、漁業、養豚業などについて、その地域的分布、出身地分布を考察したことがあったが、本稿では中心地であるホノルルにおける日本人漁業の発展の様相を戦前の史料や漁業関係者の記録などに基づいて、より詳細に明らかにしてみたい。

1、初期の頃の日本人漁業

ハワイにおける日本人漁業の発展のきっかけをなした人物に次のような人がいた。

まず、一八九七年に山口県大島郡出身である西村亀太郎が当時最新の日本式漁法を採用し、近海漁業を發展させたという。また、一八九九年には和歌山県西牟婁郡田並村出身の中筋五郎吉が妻子を伴いハワイに渡航、その際に新造の鰹船と漁具一式を汽船に運び、鰹漁で新しい方式を実施してハワイの漁業に一大革命をもたらした。この方法により、大量漁獲が可能となつて鰹一尾が二ドルから五〇〜二五セントまで下落し、大衆は恵まれたがハワイ人の漁師は自分の生活を脅かす者として中筋の暗殺を企てたことさえあったといわれている。

こうして日本人漁師は徐々に増えていき、一九〇三年頃ホノルルに

おいてすでに一〇〇名ほどいたという。⁽³⁾

さらに中筋は、漁具・漁法に種々の改良を加え、いわゆる「ハワイ型漁船」を考案したり、一九〇九年には発動機を漁船に取り付けて漁域を広め、遠洋漁業にも進出した。⁽⁴⁾ また、山口県人の柏原清作は一九二〇年代にガソリンに代わる重油エンジンを装置して運転費用を削減し、漁域の拡張や大型漁船の建造を実現した。⁽⁵⁾

2、漁業会社設立の頃

ハワイにおける漁獲は、このようにして日本人の独占的な状況となったが、実際に利益を博していたのは中国人であり、とくにホノルルの魚市場は中国人の経営で、日本人の漁獲する魚類を買取り、それを自分達が経営する市場で販売するという状態が長い間続いていた。つまり漁業の実権は中国人によって握られていたのである。

ところが一九〇八年二月、中国で起こった辰丸事件の影響で、中国人間における日本品のボイコット運動がハワイにも波及し、一時日本人漁師の漁獲した魚類を買わなかったため、日本人漁師が困難に陥った。このような実情をみて、ハワイ漁業の実権を中国人から日本人の手に引渡すべく立ち上がったのが、『*布哇新報*』の芝染太郎、『*日布時事*』の相賀安太郎などホノルル日本語新聞の幹部、そして旅館業の山城松太郎、医者の子三田村敏行などであった。彼らは演説会など日本人漁師への啓蒙運動を行い、日本人自身による漁業会社を建設すること

の急務なることを熱心に説いてまわった。⁽⁶⁾ そしてついに、日本人経営となる三つの漁業会社が一九〇八年～一九一四年の間に設立された。これにより、日本人漁師は漁業会社に漁獲物を持ってきて競売に付き、漁業会社も利益があがることができるようになった。それぞれの会社について以下にまとめておく。

① 布哇漁業株式会社

一九〇八年創立のハワイで最初の漁業会社で、前出の芝染太郎、相賀安太郎、三田村敏行や日本人漁業者により創立された。資本金五万ドル、これを五千株に分け（一株一〇ドル）二五万ドルまで増資し得る組織となっていた。当時の株主中には、アメリカ・中国人なども多数おり、いわゆる内外人経営の会社で、社長は和歌山県出身の三田村敏行であった。二代目社長アッキンソン。一九二一年当時は三代目社長クック、支配人は山口県熊毛郡上ノ関村出身の上田新吉で、三七〇名の漁師を役し、所属のギヤスリン船は五〇隻、その船長の出身県の内訳は山口三六名、広島六名、和歌山五名、静岡・熊本・沖縄各一名で、山口県出身が圧倒的に多い。場所はアララ市場である。⁽⁷⁾ 参照。しかしその後経営困難に陥ったため、一九二一年に白人所有の権利を買収し、日本人専有の「*布哇水産会社*」と改称した。この際に貢献したのが支配人の上田新吉であった。⁽⁸⁾

② 太平洋漁業会社

一九一〇年に営業に開始した。最初の資本金一萬ドルで、日本人の経営による株式会社とあるが、一九一五年当時の社長は前出の広島市仁保島出身の山城松太郎で、副社長のほか幹部に中国人の名がみられる。一九二一年当時は漁師三百数十名を使用し、所属ギヤスリン船は四八隻、その船長の出身県は、山口三〇名、広島九名、和歌山七名、千葉一名、不明一で、やはり山口出身が多いが、比較的広島出身者も目立つ。場所はケカウリケ街(クイーンマーケット・図1参照)である。⁹⁾

③ ホノルル漁業会社

一九一四年に資本金五〇〇〇ドルで中藤長左衛門により組織され、業務の発達と共に資本金の増資を図る仕組みであった。一九一五年当時社長はウイルソンで、使用人一〇〇人、ギヤスリン船一六隻。一九二一年当時は所属ギヤスリン船九隻、その船長の出身県は和歌山六名、山口三名で、和歌山出身者が中心といえる。¹⁰⁾場所はキング街オアフ市場(図1参照)の下側に事務所および競売所を設け、中山市太郎を支配人兼競売主任として発足した。¹¹⁾中山は、和歌山県海草郡木本村(現在の和歌山市北西部)の出身で、一八九九年に渡布(ハワイに渡航)。ハワイ島の耕地で一年間就労の後、マワイ島ラハイナに移り魚商となり、さらにホノルルに移って一九〇二年にキング街の魚市場で競売人として現れるが、彼がハワイにおけるその元祖とされている。

一九〇六年には鯉漁船を所有し、太平洋漁業会社の設立にも参画し、副社長にもなった。また、クイーン街に日米雜貨店を経営し、蒲鉾製造会社の社長でもあった。¹²⁾

ホノルル漁業会社が設立される直前の一九一三年の魚市場の様子については、農商務省技師田子勝弥(和歌山県人)による、以下のような記述がみられる。

同地の魚市場はホノルル市の最も繁華な地にあつて両角の最も好い処は支那人占有し、邦人経営によるハワイ漁業会社と太平洋漁業会社とは其次にある。鮮魚の販売所は日本の牛肉店の様の上に陳列し、買人にはバセヌ芭蕉(筆者注)の葉の様な草の葉に包んで渡して居る。¹³⁾

また、当時の日本人による漁業およびその販売の様子について、同年のホノルル日本語新聞の記事から拾ってみよう。

▲漁夫及仲買人

太平洋漁業会社、布哇漁業会社の二あり。前者に属するギヤスリンボートは大小合わせて十六隻、伝馬船数隻、後者はギヤスリンボート十八隻、伝馬船約五十隻居れり。漁夫は両会社を合せ約百七八十名とす。然して彼等の所得は他の職業に比し多額にて、

利益配分も甚だ複雑し居れり。先づ四五十馬力のギヤスリンボート一隻（一ヶ月に三航海とし）一航海平均五百弗の獲物を得、乗組員は伝馬船を除く外二三名より八九名とす。一航海に先づ八十本のアイス（一本三百斤にて価六十仙也）是が五十二弗、ギヤスリン四丁（一丁十二弗七十五仙）五一弗、八名の食料三十弗、餌代其他にて都合百五十弗は要すべし。利益配当は揚り高の一分を会社に納め、三分を株主に別け、是れは船の修繕費等に費す用意也。頭割に大抵一ヶ月六十弗の所得あるべし。尚ほ伝馬船の分は一隻に一人の乗組にて、揚り高は一定せず。仲買人は布哇漁業会社に廿名、太平洋漁業会社に五名、前者は場所がよきため魚棚の借賃廿五弗、後者は八弗より十一弗迄。彼等は漁夫より魚を羅買^{せび}なし売捌くものにて、普通揚り高七十弗より百弗位までにて、其の内より凡てのエキスペンスを支払はざるべからず。因に布哇漁業会社の手を経て毎月売捌く魚類は実に一万弗以上なりと云ふ。⁽¹⁴⁾

（句読点は筆者）

漁獲物の利益配分については一定のルールがあつたようで、一九三七年の領事報告にも次のように記されている。

一般の漁獲物は、漁船より市場内にある各漁業会社に交付し、会社はこれを市場で競売し、売上高の一分を天引きし、さらに各漁船の燃料、餌料、氷代、運搬費など会社より支出する諸経費を

控除して、残金を船主に交付する。漁船の持ち主は、これより三割 鯉船は三割五分⁽¹⁵⁾を控除し、残金を乗組漁師全員に利益配当として等分するといふ（原文カタカナ交り文）。

なお一九二八年当時、漁業会社としてはハワイ島ヒロにも布哇島漁業株式会社と水産株式会社があり、その他の漁業関係の団体として、ホノルル水産救護会（会長・貴田鶴松）、ホノルル水産慈善会（会長・鍵本治助）、太平洋漁業組合（理事長・中筋五郎吉）があつた。⁽¹⁶⁾

このうち、ホノルル水産慈善会は、一九一一年創立でホノルル市力カアコ地区に在住する日本人漁業者によつて組織された団体で、会員の遭難、疾病等を救護し、併せて相互の親睦を図ることを目的としたものである。⁽¹⁷⁾ 会長の鍵本治助は山口県大島郡出身で一八九九年に渡布、耕地労働の後ホノルルに移住し、発動機船を購入して遠洋漁業に従事、布哇漁業会社および布哇水産会社に関係していた。⁽¹⁸⁾

3. 鯉や鮪などの各種漁業

鯉漁業については、先に紹介した田子勝弥による、ハワイ同胞の漁業現況（一九二三年）の報告で次のように記されている。

ハワイの鯉漁業は、ホノルルの在るオアフ島から馬哇島^{マワイ}附近の近海を漁場として居るので其漁夫は総て我紀州人より成る。鯉釣

の方法なども紀州地方と同じである。漁船はギャソリン船で釣具には角を用ひ、土人も邦人と同じ様な方法で鯉釣を行つて、而して鯉を釣るには沖合に出でて海鳥の群集して居るを見て魚群を知り、生きた鯉を投げて之を集め釣を垂れる。所に拠つては礁に鯉の付き居るを釣る所もある、それに鯉は終年島の周囲に居るのであれば鯉漁業は年中絶えることがない、而して鯉に三種ありて一種は内地のマカツラの如くに、一種はソウダガツラの如く一種は鯉の形で体の側に斑点があると稱へるも実見しなかつたから何種類か瞭かでない。鯉釣の餌料鯉は各島の内湾から近海で漁獲する、其れは暗夜に火光を利用して鯉を群集させ網を用ひて捕らへるが、近年は餌取船も大に改良されてギャソリンボートや餌取船には大抵電燈を備へて居り殊に餌取船などは集魚燈を用意し一個を水中に沈め一個は舷外に出して魚を集める。然し同地では餌料鯉を貯蔵することを知らないから鯉漁業は全く餌料の爲めに支配されて居る（以下略）⁽¹⁹⁾

このように鯉漁が和歌山県出身者によって行われ、鯉をまいて一本釣りをしていたことが知れる。また、餌料鯉の畜養方法についての意見を述べている。そして鮪漁業などについては、以下のように記している。

同地の鮪漁業は、専門に漁することなく鯉漁船で手釣にする位

であり、ウルワ（ロウニシアジ）及カハラ（鯽の一種）漁業は最も盛んでオアフ、マウイ、モロカイ島などの三湮（海里）以内には居らず、遠洋に多く出漁五百哩からの沖に出て鳥島付近にも至り餌料鯉の生肉で手釣であるが其魚は実見出来なかつた。（以下略）⁽²⁰⁾

当時、鮪漁業はそれほど重要な漁業ではなかつたことが分かる。

また、一九二七年九月から二月までのホノルルにおける太平洋漁業会社、布哇水産会社、ホノルル漁業会社の取り扱つた主な魚類は表1のようであつた。やはり鯉と鮪の漁獲が圧倒的に多く、この二種がハワイの漁業を支えていることが分かる。

4. 漁業関連の職業

水産関係の製造業として、ホノルルにおいては鯉節製造、蒲鉾製造、ツナ缶詰などが発達した。

① 鯉節製造

ハワイでの元祖は和歌山県出身の山本荒太郎であつた。ハワイには紀州出身の鯉漁師が多いというのを聞き、それでは鯉節製造も面白からうと渡布したのが一九〇六年で、試験的に行つた結果が良好だつたといふ。⁽²¹⁾ 彼は『布哇日本人名鑑』（一九二七年）によると、明治六（一八七三）年生まれ、原籍地は和歌山県西牟婁郡田並村で中筋五郎

表1 ホノルルの漁業会社に取り扱った主な魚類

魚 類	重 量 (ポンド)	価 格 (ドル)	1ポンド当り価格 (セント)
アク(鰹)	901,253	45,052	5.0
アヒ(鮪)	735,744	43,557	5.9
アウ(旗魚)	242,757	28,530	11.8
オペル	151,626	33,357	22.0
アクレ(鰺)	94,262	28,568	30.3
ウク	86,208	17,241	20.0
オイオ	51,603	15,510	30.0
マヒマヒ(シイラ)	36,884	7,376	20.0
ウルア	36,231	10,869	30.0
マレット(イナ)	32,503	8,124	25.0

日布時事社編輯局『日布時事布哇年鑑』(日布時事社、1928年)99頁
にもとづき筆者作成。1ポンド≒0.45kg。

吉と同じである。住所は、ホノルル市ケカウリケ街で魚市場の近くである。明治三五(一九〇二)年一〇月農商務省水産講習所別科を卒業するや布哇の海産裕かなるを聞き明治三九(一九〇六)年3月をもって来布した。布哇近海に鰹群多きを知り専門的に研究せる鰹節製造を思立ちホノルルに工場を設けた。風土氣候の相違に基き当初は予期の結果を得座りしも経験・試練を重ね遂に故国産に劣らざる良質の

鰹節を製出するに至り日本製品を圧倒して、布哇全島、米大陸に販路を有する盛況を呈した。斯くて数名の同業者を生じ鰹節製造業が主要なる水産業の一として重視せられるやうになったのは全く氏の努力の賜物である」と記している。⁽²²⁾

鰹節はいうまでもなくハワイにおいては日本人の独占業であり、気候などの関係で、最初は製造に困難を伴ったが、次第に日本製に劣らぬ製品を算出するに至った。また砂糖、パイナップルとともにハワイから日本への土産物にもなっていた。一九二八年当時四軒の製造所があり、年産約二〇万封度(ポンド)、価格約五万ドルであった。⁽²³⁾

② 缶 詰

ハワイにおいて鰹が獲れ過ぎてこの処置に困り魚価も低落し、これを救済するためにハワイに鰹缶詰会社が設立されたという。しかし製造所ができる、逆に充分に鰹が獲れず、一九二二年、ホノルルに日米人の共同事業でハワイ・ツナ・パッカーズ会社が設立されたが、それまで三つの会社が営業困難で廃業している。⁽²⁴⁾一九二〇年には、ハワイ・ツナ・パッキング・コーポレーションが、鰹の漁獲高を上げるために日本人鰹漁夫三五名を特別技能者として会社が雇傭することの許可を米国労働省などから得て、この会社と関係の深い太平洋漁業会社の支配人である山城松太郎の長男である山城松一を日本に派遣した。そして、和歌山県西牟婁郡田並村一七名、同郡下芳養村八名、同郡湊村五名、同郡田辺町三名、同郡有田村一名、合計三四名が呼寄せの形で旅券が下付されたという記録もみられる。⁽²⁵⁾

産出額は、一九二七年で二万箱、一九二八年は一万二〇〇〇箱で、漁獲の多寡により増減がある。製品はアメリカ本土にも大量に輸出している。ツナ缶詰は油で煮、塩で淡く味付けする。⁽²⁶⁾また、原料となる

魚類とその重量は一九三五年度でアケ(鰹)二〇万二九トン、アヒ(鮪)八五〇〇トン、黄鰭鰹一〇〇〇〇トンであった。ハワイ島ヒロにもヒロ缶詰会社がある。⁽²⁷⁾

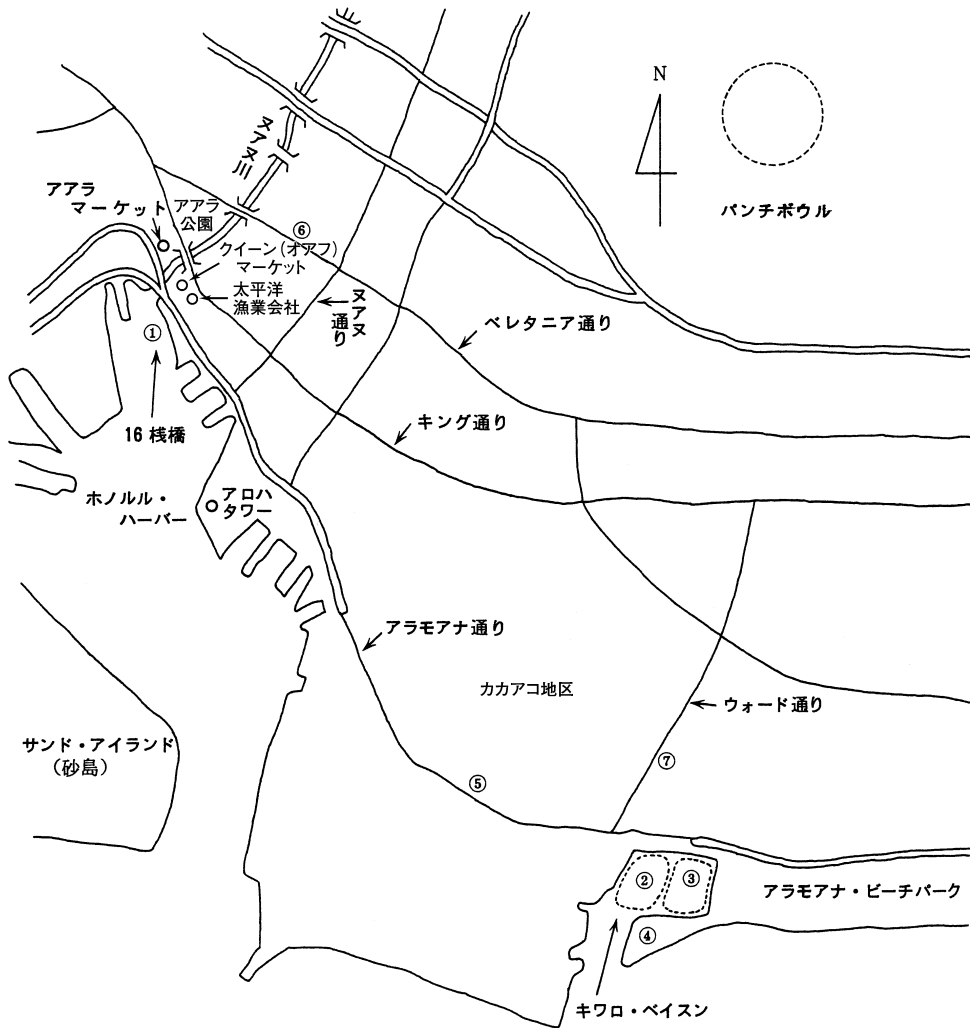
③ 蒲鉾製造

ハワイにおいて蒲鉾製造は重要な水産副業の一つであり、一九〇五年頃より始まった。一九二九年当時ホノルルに四軒の製造所があり、年間の産額は十二、三万ドル以上と見られている。この他、ヒロをはじめ各地に製造所があり、総計二〇万ドル以上に達する。製造所も需要者も日本人である。原料はオパカパカ(ヒメダイ)、オイオ、カジキトシ(旗魚)、鱧⁽²⁸⁾などである。一九四〇年の住所録においては五軒で、そのうち「大谷生魚店並びかまぼこ」はアラ・マーケットにあった。⁽²⁹⁾ 経営者の大谷松治郎は、山口県大島郡東和町沖家室出身で一九〇八年に渡布。マウイ島ラハイナで卸売り商店に勤めた後、ホノルルに出て布哇漁業株式会社が創立されたのを契機に一九一一年にキング魚市場が開店し、最初の店子として大谷魚店の名称で生魚店を開業した。一九一三年には鮮魚行商も始め、一九一八年アラ魚市場に移転、一九二〇年には合資会社大谷商會を創業し日本食料品の販売業を経営しながら、一九二九年にアラ市場内の一部にコンクリート建ての蒲鉾製造部を発足した。広島出身の三島工場長を招聘し、一人の製造部員でおこなったのである。⁽³⁰⁾

5. 一九三〇年代以降の状況

造船業は主として漁船を建造している。一九四〇年度の住所録では、五つの造船所の名前が記されており、うち三つがケワ口湾に面したアラモアナ・ロードに位置している。⁽³¹⁾ その一つの谷村造船所の経営者である谷村丈一は、大谷と同じ山口県大島郡沖家室島出身で一九一二年渡布し、一九三〇年に造船所を創設、ホノルルにおける最大の造船所で就労者八名とある。⁽³²⁾ また、船井造船所の創業者である船井清一は、和歌山県西牟婁郡江住村出身。代々船大工で一九一七年にハワイに渡航し、修理の仕事の後、一九一九年に造船所をカカアコに設立した(図1参照)。彼は日本式鰹船をはじめ多数の船を作った。とくに日本式漁船(サンパン)は日本人漁師にとって頼りになる存在だったという。⁽³³⁾

漁具店は一九四〇年度の住所録では八軒の店がある。⁽³⁴⁾ そのうち二軒は同じ戎崎漁具店で本支店が掲載されていると思われる。出身県を『日布時事布哇年鑑』(一九四一年)で調べると、戎崎を含め山口二名、広島二名、和歌山・鳥取、熊本各一名である。このうち空中光太郎の履歴をみると、広島県佐伯郡高田村出身で、一八九七年ハワイに渡航、ハワイ島ホノカア耕地、カウアイ島カバア耕地に数年間就労の後、ホノルルに出て日米食料雑貨店を開業する。その傍ら日本人最初の鑄鉄工場を企て、あるいはキング街の魚市場付近に支店を設けて漁具一切の販売をする⁽³⁵⁾とある。また、山口県玖珂郡出身の嘉屋嘉一は氷店を営業し、夫人が漁具店を兼営し、その釣竿は各地の太公望に



- ① ホノルル・ハーバーの16 棧橋。
- ② 1933 年日系人漁船の移転先。このあたりに船を着けた。
- ③ 1933 年頃は浅瀬で棧橋なし。
- ④ もとは浅瀬。浚渫した土砂でのち陸地となる。
- ⑤ 船井造船所のあった所。
- ⑥ 貴多商店開店場所 (1925 年)。
- ⑦ 1933 年の移転先。

図1 日本人漁業関係の地図 (1933年頃)

『太平洋学会誌』第57号 (1993年1月) 37頁の地図を筆者改変。



大型 漁業 船
 大小瓦斯 燐 船
 造船業 一切 請負

船井造船所
 所主 船井 中
 電話六八一五四

ホノルル市アラモアナ街八〇二

弊工場はホノルル造船工場の元祖として永年の経験と秀でた手腕は堅牢卓越せる點にあります

雑貨商並に
 釣道具 一切

釣道具なら何んでも
 揃ふ弊店へ...

貴多商店

カカアコ、ワート街一三三 電話五六九九



漁船、遊覧船
 ヨット 其他 新造

谷村造船所
 谷村 丈一
 電話：六六五九八

ホノルル市アラモアナロード一〇五四

永年の経験と熟練工の手腕を持つて完全な優秀船を製作致します



縁起の良い釣道具
 ●漁具、船具一切豊富
 ●大廉價提供いたします
 北クイン街一貳〇電話二二二三

戎崎漁具店

支店：ワード街二貳一電話六五〇二六

『布哇日本人実業紹介誌』（布哇報知社、1941年）より

愛用せらるゝとある。⁽³⁶⁾

さらに喜多鶴松は和歌山県西牟婁郡周参見町出身で、一九〇六年ハワイに渡航し鯉船の船頭をしていたが、歳をとったので一九二五年に陸に上がり、食料雑貨店である喜多商店を始めた。主に漁船や漁船員の用品および漁船に積み込む食料品を扱った。場所は最初、ホノルル港やアラ・マーケットに近いベレタニア通りであった。しかし、漁船の繫留場所の移転とともに、喜多商店もケワロ湾に近いカカアコのウオード街に引越すことになる。

漁船は従来から、ホノルル港の一六棧橋に繫留していた。アラ・マーケットもそこから近い場所に立地していた。しかし、次第に棧橋が古くなったなどの理由で、一九三三年頃ケワロ湾に移動することになった。当時、ケワロ湾は浅瀬であったが徐々に浚渫工事を行い、戦前までは、港としての形を整えていった(図1)。漁業会社は、アラ・マーケットの中にあつたので、ケワロ湾で水揚げされた魚は、トラックでアラモアナ通りを通じて、アラ・マーケットのオキシシヤン(オークション・ルーム・競市)まで運んだ。⁽³⁷⁾

以上のように二〇世紀に入って大いに発展してきた日本人漁業も一九四〇年頃から日米関係が険悪となり、アメリカ政府はハワイの日系人の所有する漁船を調査し、違法な漁船所有者を取り締まり、罰金を科した。市民権のある者はいかなる船も所有できるが、市民権のない者はわずか二〇フィートの船しか使えなくなり、大型の鯉船は軍用船として徴発されてしまった。こうして大型漁船を主体として日本人が

開発したハワイの漁業も太平洋戦争の直前に大きな打撃を受け、開戦とともに壊滅してしまつたのである。⁽³⁸⁾

むすびにかえて

これまでみてきたように、和歌山と山口出身者の名前がたびたび登場し、この二県出身者がホノルル日本人漁業の中心的な役割を果たしていたことが分かる。一九三七年の領事報告にも「一般漁業に従事する者の七割は山口県出身者にして鯉漁に従事するものの八、九割は和歌山県人なりと言ふ其の他の各県人は九州各県、静岡、福島等の県人なるも其の数多からず(原文カタカナ交り文)」⁽³⁹⁾とあり、喜多鶴松の長男である喜多勝吉も「一九三〇年代後半頃のホノルルのカツオ船は、ほとんど和歌山県人の所有で、あとは山口県人と広島県人が一隻ずつ持っているだけだつた」⁽⁴⁰⁾そして「鯉船、鮪船以外の小さな船での一本釣りは、瀬戸内海の山口、広島船が多かつた」と語っている。⁽⁴¹⁾確かに鯉船を導入し大型船へと発展させていった和歌山県人はハワイの鯉漁では独壇場であつたように思われる。しかし全体の船主などの数では、山口県出身者が多数を占めていたのは確かである。これに関して、一九四〇年度の魚商および生魚マーケットの経営者のうち、出身県に分かる人物を調べてみると、山口一八名、広島一〇名、熊本・沖縄各六名、福岡三名、山梨・和歌山各二名、新潟・高知各一名で、やはりこの分野でも、山口が最多で広島も多く、沖縄の進出が目ま

れよう。

筆者は以前に、一九一〇年および一九二九年の時点でホノルルの漁業関係者のうち和歌山県人と山口県人が住み分けをしている傾向を指摘したが、さきの喜多商店の例でみられるように、鰹漁を主とする和歌山県人はやはりホノルル港やアラ・マーケットに便利なダウンタウン地区に住む傾向があり、山口県人とくに大島郡沖家室を中心とする人達はそれより少し離れたカカアコ地区に当初から住みつき、次第にその数が増えていったものと考えられる。

和歌山県（とくに西牟婁郡）出身および山口県（とくに大島郡）出身者に関する出身地域や居住地域との関係については、稿を改めて検証したい。

注

- (1) 拙著『ハワイ日系人の歴史地理』（ナカニシヤ出版、二〇〇三年）。
- (2) 和歌山県編『和歌山県移民史』（一九五七年）五一五頁。
- (3) 木村芳五郎・井上胤文『最新正確布哇渡航案内』（博文館、一九〇四年）一七頁。
- (4) 前掲注(2)五一五頁。
- (5) ハワイ日本人移民史刊行委員会編『ハワイ日本人移民史』（布哇日系人連合協会、一九六四年）二〇八頁。
- (6) 相賀溪芳『五十年間のハワイ回顧』（同刊行会、一九五三年）三六七頁。
- (7) 日布時事編輯局『布哇同胞発展回顧誌』（日布時事社、一九二二年）五九～六〇頁および五七頁の広告。

- (8) ①曾川政男『布哇日本人名鑑』（同刊行会、一九二七年）一九八頁。
②松田元介編『御大典記念防長人士発展鑑』（山都房、一九三二年）二七頁。

- (9) ①前掲注(7)五九～六〇頁および三〇六頁の広告。②森田榮『布哇日本人発展史』（眞榮館、一九一五年）二七七～二七八頁。
- (10) 前掲注(7)五九～六〇頁。および前掲注(9)②の二七六頁。
- (11) 大谷松治郎『日系漁業会社の変遷を語る』（『布哇タイムス創刊六十年記念号』布哇タイムス社、一九五五年）九の二〇～二二頁。
- (12) ジャック・Y・田坂『ハワイと和歌山県人』（『太平洋学会誌』一九八六年九月）六七頁。
- (13) 田子勝弥『ハワイ同胞の漁業現況』（一九二三年）（商工歴史刊行委員会編『虹の橋』日商工七〇年史』ホノルル日本人商工会議所、一九七〇年所収）一〇〇頁。
- (14) 『水府日本人職業生活状態』、『日布時事』四〇六〇号（一九一三年一月一日）記事。
- (15) 外務省外交史料館史料…（E49078）『本邦漁業雑件』昭和二年六月二八日 在ホノルル総領事福岡豊吉『布哇漁業調査』一五頁。
- (16) 日布時事社編輯局『日布時事布哇年鑑』（日布時事社、一九二八年）一〇二頁および一八六頁。
- (17) 前掲注(9)②の四九九頁。
- (18) 前掲注(8)②の四九頁。
- (19) 前掲注(13)一〇〇頁。
- (20) 同前。括弧内は筆者注。
- (21) 日布時事社編輯局『日布時事布哇年鑑』（日布時事社、一九二九年）一〇四頁。
- (22) 前掲注(8)①の二二五頁。
- (23) 前掲注(16)九八頁。および前掲注(21)一〇四頁。ちなみに、ハワイでは鮪も鰹もツナ(tuna)といふ。
- (24) 前掲注(21)一〇五頁。

- (25) 外務省外交史料館史料：(38241)「布哇国ニ於ケル本邦移民関係雑件」のうち「大正一〇年一月布哇鯉魚罐詰会社へ日本漁夫三十五名輸入方二関スル件」。しかし、これに関する以後の記録は見当たらない。
- (26) 前掲注(16)九九頁。および前掲注(21)一〇五頁。
- (27) 藤井秀五郎『大日本海外移住民史第一編布哇』(海外調査會、一九三七年)中巻二二頁。
- (28) 前掲注(21)一〇五頁。
- (29) 近藤菊次郎『分類布哇日本人事業家年鑑』(事業家年鑑社、一九四〇年)一四一頁。
- (30) 大谷松治郎『わが人となり足跡―八十年の回顧』(一九七一年)一七〇～一七八頁。
- (31) 前掲注(29)五九頁。
- (32) 大久保源一編『布哇日本人発展銘鑑 防長版』(布哇商業社、一九四〇年)五三頁。
- (33) ①『ハワイ報知』一九七八年三月二日記事。②上田喜三郎「ハワイ日系人の生活史⁽¹⁴⁾」(『太平洋学会誌』第五五・五六号一九九二年九月)六四～六五頁。なお、③上田喜三郎「ハワイ日系人の生活史⁽¹⁵⁾」(『太平洋学会誌』第五七号一九九三年一月)三三頁に、日本式漁船はハワイでサンパンといわれ、小さいものは伝馬船から大きいものはエンジンが付いた漁船まで示している。中国語で三板、英語で sampan と書き、中国、東南アジアの沿岸や河川で用いられる艫を權で漕ぐ小船のことをいう、とある。
- (34) 前掲注(29)一四九頁。
- (35) 前掲注(27)下編六五頁。
- (36) 前掲注(8)①の一二〇頁。
- (37) 前掲注(33)③の三六～三九頁。
- (38) ①上田喜三郎「ハワイ日系人の生活史⁽¹⁸⁾」(『太平洋学会誌』第六一号一九九四年一月)六四～六五頁。②上田喜三郎「ハワイ日系人の生活史⁽¹⁹⁾」(『太平洋学会誌』第六二号一九九四年六月)五〇～五一頁。
- (39) 前掲注(15)八頁。
- (40) 前掲注(33)③の三九頁。
- (41) 上田喜三郎「ハワイ日系人の生活史⁽¹⁶⁾」(『太平洋学会誌』第五八号一九九三年六月)一七頁。
- (42) 前掲注(29)一四二～一四三頁および一四八～一四九頁。
- (43) 前掲注(1)七八頁。
- (44) 前掲注(30)三一頁に、大谷松治郎が一九〇八年に来布した頃、カアコ地区に早くから沖家室出身者が在留していたと述べており、四名の名前を列記している。
- 〔付記〕この研究の資料収集にあたっては、平成一八～二一年度科学研究費基盤研究(A)日本におけるエスニック地理学の構築のための理論的および実証的研究(研究代表者：山下清海・筑波大学大学院教授)の分担金を使用した。